



人の意識に潜む邪龍態を倒せ！ 「龍を喰らいし者」が今立ち上がる！

『G-九』——奇妙な表題である。何かの番号のようにも、名前のようにも見える。ミステリアスなタイトルが示すように、作品も謎に満ちたはじまり方をする。

満天の星空と、そこに浮かぶ女体を模した宇宙船。ここで視聴者はこの作品がいわゆるSFに属することを知る。

だが景色はすぐさま、電柱や瓦屋根が立ち並ぶ現代日本の下町へと一転する。そこに倒れている全裸の女性——モノログから、彼女が記憶を失っていることがわかる。

後に判明する彼女の名はアガルタ。彼女を助ける生体兵器の名前はG-九だ。物語中では、G-

九がアガルタの「子供」という意味深な言葉も表れる。

もともとはゲームとして企画されたというこの『G-九』で、プレイヤーともいえる主人公がアガルタだ。彼女は人の意識に巣食う邪悪な生物、邪龍態を倒すべく宿命づけられた魔導士だが、皮肉なことにその片腕に敵である邪龍態を宿している。

つまり邪龍態とは、この世界において攻撃性を司る諸刃の剣なのだ。アガルタにとどまらず、その従者たるG-九もまた邪龍態のコピーともいべき存在で、制御が難しい兵器とされている。アガルタとG-九、この暴発をはらんだコンビ

ネーションを補佐するのが三五十だ。冷静沈着な機械人で、自分自身を喪失しがちなアガルタを常に背後から助けてくれる。

もつとも、もとは人間だったといい、生い立ちが謎に包まれた三五十をあまり信用するのは考えものかもしれない。物語中でも、記憶を失ったアガルタは最初、誰が味方で誰が敵であるかの判断すつつかないのだから。

三五十は当初、声のみで登場する。だが、その姿は頭部に老人・青年・女性の3つの面が取り付けられたロボットで、『スター・ウォーズ』のC3-POに匹敵する存在感を放っていることが後にわかる。3つの人格は、ある星域で遭難して死んだ人々からとったとされているが、生前の記憶はいっさいないので、なぜ彼らが遭難したのか、また、お互いにどのような関係であったかはまったく不明である。

さらにもう1人、冒頭に登場した女体の宇宙船、八界もまた、アガルタの仲間に入れてもいいだろう。実は人格を持っているという八界だが、それを知っているのは同じ機械生命体である三五十だけだ。物語中で八界が言葉を発することは無いが、それだけに不気味な存在だ。

画ニメ『G-九』は、その時間的な制約から、壮大な世界観の一端を見せるにとどまっている。邪龍態とはいったい何なのか？ アガルタとG-九の隠された過去とは？ 三五十の目的は？ などなど、謎は尽きない。もとの企画であったゲーム、またアニメ、実写など、今後の展開に期待したい。

